

千都の歴史 第一回

「千都の杜」は「兵どもが夢の跡」

副会長：藤井 正樹

1. 縄文から中世へ

能ヶ谷の名は、天文12年（1543）に紀州熊野の豪族神蔵甚左衛門盛清が入植して小田原の後北条氏の配下となり、翌年、戦功により後北条氏2代当主の氏綱から土地を賜って直ヶ谷と名付けたが、天正2年（1574）に5代当主が氏直と改名したため「直」を遠慮して「能」に改めたと伝えている。この来歴には諸説あり、紀州田辺の神蔵甚左衛門重信が文治元年（1185）に源義経に扈從して来住したなどとも伝えるが、いずれにせよ今も当地には神蔵姓が多く、香山園の園主が神蔵宗家を称し、俳人の神蔵器（「風土」主宰）も当地の生まれで「遠つ祖（おや）は田辺水軍月祀る」と詠んでいる。なお、能ヶ谷を直ヶ谷と旧称したのは、谷戸が南北に真っ直ぐ伸びているからとする地形説と、荒野や湿地を開墾して田畑に直したからとする開墾説がある。

「千都の杜」の開発を担った能ヶ谷東部土地区画整理組合の理事（9人）として神蔵氏（2人）とともに名を連ねた鈴木氏（3人）や園部氏（2人）のほか、当地に同姓の多い夏梅（目）氏（悠々園の裏に同族後裔の墓所がある）や森氏の祖もまた神蔵氏とともに来住したと伝えている。神蔵氏に康暦2年（1380）、夏梅氏に応永13年（1406）在銘の板碑（板石塔婆）が伝来することから、神蔵氏の来住は14世紀以前まで遡ることになるのだが、「千都の杜」地域を最初に開発したのは縄文人である。

「千都の杜」の開発に先立つ平成9年に能ヶ谷東部遺跡として縄文時代や古墳時代を中心とする住居址・陥し穴などの遺構や土器片・石器などの遺物が発掘されている。発掘調査を行った4地点の調査面積が総開発面積の1%強にすぎないことから遺跡の全貌は知る由もないが、今も空地・畑地に散乱する縄文土器や土師器・須恵器の破片は、調査範囲を大きく上回る遺跡規模であったことを示唆している。「千都の杜」に隣接する平和台遺跡や仲町遺跡からも約4千年前の縄文時代中期を中心とする遺構・遺物が出土しており、文筆家の白洲正子も『鶴川日記』（昭和54年刊）所載の「鶴川の周辺」に「私どもの畑からも、耕すたびに縄文土器の破片が出た。いずれも小さなかけらなので、畑のすみに積みあげておくうち、土にかえってしまったが、紀元前から開けた古い土地であることは想像がついた」と記している。当地が古代人の暮らしを支える肥沃な土壌であったことを証する能ヶ谷東部遺跡には平和台や仲町のような保存遺構や標識もなく、土器片もそのうち「土にかえってしま」うのであろう。



その能ヶ谷東部遺跡からは古墳時代後期の住居址3戸が発掘されたが、能ヶ谷香山古墳群で発掘された円墳2基や横穴墓19基も同時代の造営と推定されている。神蔵器に「町田市香久山」と題する「霾（つちふ）るや浅く窪みて穴居跡」の句があるのは、今日、香山園の東南端の斜面に一部が遺る横穴跡を詠んだものであろう。墓を穴居と云うのは詩人の謂いだが、香山で住居址が発見されていないこともあり、私は香山の被葬者は「千都の杜」地域の住人ではなかったかと想像を逞しくしている。なお、隣町三輪の名は奈良時代に大和三輪からの移住者が故郷の山容に似た風致に故郷を偲んで付けたと云い、元慶元年（877）に大和三輪から勧請したと伝える熊野・相山両社や当時の横穴古墳群が点在する。その三輪や香山（香久山）の近隣には奈良、大和（市）、当麻（相模原市）など大和に通じる地名もあり、この辺りには大和人、大和文化が広範囲に流入したものであろう。

さて、神蔵器に「雛飾るかつて能ヶ谷村九戸」の句があるが、縄文人の後裔に大和や紀州からの渡来人が交わって村落を形成したであろう能ヶ谷が人家9戸の寒村だったのは何時頃のことだろう。中世における戸数を記した史料を知らないが、『新編武蔵風土記稿』（文化11年〈1814〉～文政5年〈1822〉調査）に「家数五十五軒（能ヶ谷）村内に散住せり」、『武蔵国南多摩郡能ヶ谷村誌』（明治21年編）にも55戸とみえており、中

世にもこの程度の戸数がなくては当時建立された多くの社寺を維持できなかつたであろう。能ヶ谷の鎮守である能ヶ谷神社は大正3年に住吉谷戸（能ヶ谷の北部）の住吉神社（文治6年〈1190〉創建）、下能ヶ谷（能ヶ谷の東部、「千都の杜」地域）の天照大神社（応永2年〈1395〉創建）、上能ヶ谷（能ヶ谷の西部）の表谷神社（文明9年〈1477〉創建）と神明社（創建年不詳）の4社を東照宮（正保年間〈1644～47〉創建）に合祀したものと云う。また、妙行寺は永和元年（1375）に下能ヶ谷の字二ノ倉に創建（宝永2年〈1705〉に現在地に移転）したと云い、上能ヶ谷の蓮清寺は享徳3年（1454）の創建と云う。

平成6年に藤の木交差点（下能ヶ谷）の北西（4丁目22）から約9万枚に及ぶ古銭が出土しており（出土銭は町田市指定有形文化財）、15世紀第2四半期の埋蔵と推定されていることから、当時この地域にはすでに貨幣経済の発達を背景とした有力な農民や土豪が割拠していたのであろう。能ヶ谷が14世紀後期に有力者を中心に村落が形成されていたとすれば、神蔵氏や夏梅氏に伝存する板碑の年号とも符合する。前記の明治21年編能ヶ谷村誌に「山脈西北ノ方全郡広袴村ヨリ連リ東ノ方…都筑郡片平村ニ延亘シ東南ノ方ハ村内二ノ倉山及都筑郡上麻生村ニ連絡シ雑木鬱生ス」とみえており、「千都の杜」が拓かれた舌状台地の南端は二ノ倉山と呼ばれて樹木が鬱蒼と茂っていたことが判るが、二ノ倉は能ヶ谷5丁目28・30（イトーピア住宅地内）辺りの旧字名でもある。その二ノ倉山に住んだ古代人の後裔が山を下って紀州人とともに村落を形成した後、「夏草」に覆われた二ノ倉山は「兵（つわもの）どもが夢」を結ぶ舞台になるのである。（続く）